盛岡中央高校附属中学校　職員通信　発行日　2019 年（令和元年）９月 18 日（水）

RISING SUN

～学び続ける職員集団のための授業力向上通信～

第５号
発行責任者
副校長　下町壽男

注目授業

山田容平先生
8月23日(金)
1年2組　英語

８月２３日に、山田先生の１年２組の授業におじゃましました。その授業の様子と、私の感想を記しておきたいと思います。

テクノロジを使いこなす

本校では、各教室にプロジェクタが配備されていますが、山田先生はその環境を、自身の授業の中に自然な形で取り入れています。

私などが ICT を用いた授業を行おうとすると、パソコンでパワーポイントの「力作スライド」を作って、それをじっくり見せる形で進行するというような、大仰な形になってしまいがちです。

そのような授業では、スライドを見ることと、教師の話しを聴くことの切り替えが頻繁に繰り返されることで、集中力が持続しないケースも生じます。

ところが、山田先生は、ポケットからさりげなくスマホを取り出し、状況の説明や、新出単語の導入時にさらりと画像を提示したり、アプリケーションを用いて生徒を指名したりと、その仕草が自然でクールなので、先生の言葉と画像が一体的に生徒の頭の中に入っていくように感じました。

なるほど昨今の若い先生は、コミュニケーションを行う場合、テクノロジをこのように自身の言葉と並行的に使うことに慣れているのだなあと感心しました。

4技能を意識した授業展開

英語４技能とは、「聞く（リスニング）」「話す（スピーキング）」「読む（リーディング）」「書く（ライティング）」という４つのスキルを表します。

山田先生は、単語やセンテンスの暗記を強要するのではなく、**聞く→全体で話す→個で話す→書いてまとめる→ペアやグループで表現しあう**、というように、複数の活動をスピーディーに配置していくことで、生徒のモチベーションを高めつつ定着を図っていました。

私の時代では、ひたすら音読せよとか、できない単語は 100 回ノートに書け！などといった物量型の指導が中心でしたが、このように４技能を意識した指導によって生きて働く英語力になっていくのだなあと思いました。

安全で安心な学びの空間

今回の授業のテーマは、「身の回りにあるものの数量をたずねる表現を理解し使えるようにする」というものでした。具体的には、How many 複数名詞～という構文を使いこなすということが一つの目標です。

山田先生は、生徒の身の周りにある物に関して問いかけを行ったり、ファーストフード店でのやりとりを想定したロールプレイを行うなど、対話を積極的に取り入れた授業を展開していました。

生徒は皆ニコニコと笑顔で、とても楽しそうに授業を受けていることがわかります（裏ページ写真）。それは、教師が一方向的に教え込もうとしていないこと、そして教室が間違いや失敗が許される安心な場所になっているからではないかと思いました。

主体的な学びを目指す

山田先生は、生徒への問いかけや生徒どうしの対話を通じて「自分たちで授業をつくる」ことを目指しています。

「主体的な学び」に対して、しばしば凡庸な教師から次のような言葉がささやかれます。

「主体的な学びを行えば、教科書が遅れる」

「主体的な学びは授業規律を乱す」

このような主張は、主体性を「生徒の好き勝手にさせること」「自由にふるまわせること」という勘違いから生まれていることと思います。

山田先生は、人一倍生徒の学習規律や学びに向かう姿勢に対して妥協せずに向き合う、いわば厳しさを持った先生です。しかし、それは生徒を管理して思考停止に追い込み、教師に従順な子どもをつくりだすということとは真逆です。

主体的な生徒とは、課題を見つけ、自ら考え行動することで周囲の環境を変化させることができる人間といえます。あるいは他者のために自分は何ができるかをつねに考えられる、人としての優しさを持っているということかもしれません。

であるなら、しっかりした生活習慣を身に付け、規律を守ることと、主体的に生きることは、決して相矛盾することではなく、むしろ、相乗的に互いを補完し、高め合うものであると思います。

山田先生の授業を参観しながらそんなことを考えていました。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

授業ぶらり観てある記

先日、１年１組の前の廊下を歩いていたら、理科の山本先生がとても面白い授業をしていたので、思わず足を止めて眺めておりました。

山本先生は、硬貨を１枚入れたドデカいビーカーに水を注ぎ、硬貨が消えてしまう様子を演示していました。光の屈折現象の説明ですね。

生徒は目を輝かせて授業に参加していました。